

1【木村県政一年の振り返りと総括について】

◆（淵上陽一君） 皆さん、おはようございます。山鹿市選出・自由民主党の淵上陽一です。

本日は、5期18年の議員生活で初めて党を代表して質問に立つ機会をいただきました。誠に光栄ですが、責任の重さに身の震える思いでもございます。甚だ役不足ではありますが、精いっぱい努めさせていただきますので、何とぞよろしくお願い申し上げます。

それでは、発言通告に従いまして質問に入らせていただきます。

最初にお尋ねいたしますのは、木村県政1年の振り返りと総括についてであります。

木村知事とは、2012年7月、知事が総務省から出向してこられて以来、共に仕事をさせていただいてきましたが、その中で最も印象に残っておりますのは、一昨年11月、ペルーとブラジルを訪問し、熊本県人ペルー移住120周年記念式典並びにブラジル熊本県文化交流協会創立65周年記念式典に、当時の木村副知事と県会議長であった私が熊本県を代表して参列した出張であります。

広大な南米大陸を飛び歩く2週間の旅は、大変ハードな毎日でありましたが、1日の予定を終え、ほぼ毎晩杯を交わしながら、副知事の熊本に対する熱い思いを聞かせていただき、議論を交わしました。それから1年半、このような形で木村知事への質問に立つことになろうとは思いませんでしたが、大変ありがたい機会でありますので、本日は、木村県政1年の振り返りと総括についてお尋ねいたします。

1年前、木村副知事は、蒲島知事が生み出されたよき流れを継承し、さらに発展させることを目指して、知事選挙への出馬を決断されました。

木村候補が目指そうとしている熊本県の将来像に共感した我々自民党は、推薦という形で支援させていただいた結果、木村候補は、県民の信任を得て見事当選、昨年4月、熊本県知事に就任し、熊本県のかじ取りを託されました。

かつては総務省職員として様々な経験を積まれてきた木村知事ですが、この1年は、恐らくこれまでの人生の中で大変ドラマチックな1年であったことでしょう。

知事は、2度の熊本県出向を通じて、蒲島知事の下で約7年、商工政策課長、総務部政策審議監、総務部長、そして副知事と様々な役職を務めてこられたことから、知事就任の時点で、既に県全体の状況はもとより、県庁の組織や風土、知事の業務について、必要かつ十分な理解と見識をお持ちであったことと存じます。

しかし、そうして就任された木村知事であっても、実際に知事として10か月間を過ごしてみられて、熊本県知事の任務に関し、思っていたとおりのことがあれば、違っていたこともあり、さらには、知事になって新たに見えてきたことなど、様々な御感想がありがたいことでしょう。

熊本県では、今、TSMC社の菊陽町進出を契機として、産学官一体となつての半導体産業集積が進展することで、巨大な経済効果が生まれることが期待されている一方、それから派生する様々な課題が指摘されており、県民の懸念解消のための対応が求められています。

一方で、全国共通の課題である地方創生の推進や物価高騰への対策に加え、令和2年7月豪雨からの創造的復興、緑の流域治水、水俣病問題など、熊本の固有の課題にも引き続きしっかりと対処していかなければなりません。

知事の熊本を思う情熱を形にしていくためには、県庁全体が一丸となって効果的な政策を着実に実行していく必要があり、そのためには、県職員の存在や役割に対する客観的かつ正当な評価と職員が積極的に仕事に取り組むためのよき動機づけが大変重要であることを、釈迦に説法ながら、あえて申し添えます。

その上で、知事にお尋ねいたします。

知事御就任から今日までの10か月間に感じてこられたこと、職員への思い、そして、これからの熊本県政をどのような哲学と気構えを持って運営、推進していこうと考えておられる

のか、お尋ねいたします。

◎知事(木村敬君) 自由民主党の代表質問、瀬上議員からの御質問にお答え申し上げます。

昨年4月に知事に就任し、様々な政策に対して判断を下し、その責任を負うという知事の業務の重責を、改めて痛感しております。

具体的には、災害対応において、今年度は、幸いなことにこれまで人命が失われるような大きな災害は発生していないものの、梅雨時期には本県にも線状降水帯の発生予測が複数回発表されるなど、県民の生命を脅かす災害発生のおそれがありました。

特に、昨年8月の台風10号でございますが、この台風10号は、進路が平成11年の甚大な高潮被害をもたらした台風と大変進路が似ておりましたので、非常に強い危機感を持ちまして、万全な対応に努めました。

災害対策本部の設置といった対応方針について、副知事や危機管理監と昼夜を問わず連絡を取り、知事として県民の生命を守る最善の対策ができているだろうかと、常に自問自答を繰り返しながら災害対応に挑みました。

今後とも、県民の命と暮らしを守ることを第一に、引き続き緊張感を持って災害対応に取り組んでまいります。

また、就任時から、職員に対しても、現場に出向き、県民や市町村、関係団体の方々の声を聞き、政策に反映する現場主義の徹底を呼びかけてまいりました。

まず、私自身が市町村に出向き、直接県民の皆さんのお声を聞きますお出かけ知事室を開催し、これまで23の市町村を訪問し、361名の方と直接意見交換をさせていただきました。

このほかにも、市町村長、各種関係団体、さらには子供たちや子育て世代の方々など、政策に関する幅広い方々とも、直接対話、意見交換をさせていただきました。

現場の当事者ならではの御意見をいただいたことで、私自身の政策形成の視野が大きく広がったと感じております。

職員には、やってみなっせの精神で、リスクを恐れず、挑戦し続けることもお願いしてまいりました。

これまで、各推進本部における取組ですとか、現在、この議会に御提案させていただいております来年度予算の編成など、スピード感を持ってしっかりと業務に取り組んでもらったことに感謝しております。

今後の県政運営に当たって、これまで様々な現場や関係者の方々と接して感じていることは、あらゆる分野において労働人材や地域の担い手などの人手不足が問題となっていることでございます。

このため、今後は、人づくり、人を育てるということを特に意識して、政策の練り込みをしっかりやっていきたいと考えております。

また、これまで、災害からの創造的復興から始まり、TSMCの進出など、経済面の対応に注力する状況が続いていますが、私は、行政が果たすべき根幹的な役割は、教育と福祉にあると思っております。

今後は、熊本の将来を担う子供たちや子育て世代、さらには高齢者や障害者、皆様がきらきらと輝き、学びや生活ができる環境、社会づくりを進めてまいります。

私が目指す熊本を実現するためには、職員に、失敗を恐れることなく、伸び伸びと何事にも挑戦しながら、日々の業務に取り組んでもらうことが重要であると考えております。

そのためには、ワーク・ライフ・バランスの実現やハラスメントの防止など、職員が働きやすい職場環境をつくっていくことが不可欠です。

多様な職員が活躍できて、働きやすい、そして自分の考えやアイデアを気軽に上司に相談できる風通しのよい職場をつくっていきます。

現在、人事、人材育成に関する基本方針の改定作業を進めております。既存の枠から飛び出す精神で、積極果敢に挑戦していく職員の育成にも努めてまいります。

私自身、コミュニケーションの活性化や職員が相談しやすい環境づくりのため、例えば、知事執務室のドアをオープンにしたりですとか、県職員組合のユース部とか市町村からの研修生など、若手職員と意見交換をする機会を積極的に設けております。

また、政策の推進に際しては、当然、地域住民から選ばれた議員各位からいただく様々な御意見、御提案、それらに加えて、これらを補完する形で現場を訪れて県民の皆様から直接意見を伺うことが大変重要と考えており、これからも現場主義を大事にまいります。

職員が働きやすい環境の下で、現場の声も踏まえ、県民と一緒に人づくりにつながる創意工夫に富んだ政策を立案、実行していくことで、子供や若者が笑顔になり、ひいては県民みんなが笑顔になり、持続的で活力あふれる熊本の実現に努めてまいります。

以上でございます。

◆（淵上陽一君） 知事より、就任後1年を振り返っての感想と今後の県政運営の目標について、大変明快な御答弁をいただきました。

質問の中でも申しましたが、知事の情熱と目標を形あるものにしていくためには、何と申しましても県庁が一丸となって効果的な政策を着実に実行していくことが必要であります。そのためには、知事がおっしゃったように、職員の皆さんが伸び伸びと働ける環境を整えることが大変重要であります。

以前、蒲島知事がこんな話をされたことがあります。

私は、東大教授時代、学生に教えない教授ということで有名でしたが、教えないことで学生たちが自主的に勉強する、その環境を整えるのが私の役割でした。県庁においては、全職員に、1、スローガンを立てろ、2、皿を割れ、3、全ての職員が知事となれと言っているんです。皿を割れというのは、リスクを恐れず、仕事をどんどんやれということ、そうすることで県庁全体がうまくいくのです。

木村知事は、学生時代は教えない蒲島教授の下で学ばれ、官僚となられた後も、蒲島前知事の下、熊本県政の最前線でたくさんの皿を割りながら働く経験をしてこられたからこそ、県職員の皆さんに対して、やってみなせ精神で挑戦をと呼びかけておられるのであります。

熊本県が、木村知事のリーダーシップの下、様々な困難を克服し、新たな繁栄と発展に向かって大きく飛躍し続けることを心より期待いたします。